

# 神様が求められるもの

## —この私に

令和4年生神金光大神大祭 祭典前の教話から

辻井篤生（和歌山・勝浦）

### 神様からの宿題を頂いて

生神金光大神大祭、おめでとうございます。

私は現在、東京都小金井市にあります金光教東京学生寮で寮監の御用を頂き、早くも約30年が経ちました。

ちようど私が寮監として赴任した頃から、世の中では「生きづらさ」や「心の病」という言葉が現れ始め、「不登校」や「ひきこもり」などの、精神的に悩みを抱える人が増えてきました。東京学生寮で

もご多分に漏れず、そういう学生が現れてきました。しかし寮生だけではなく、実は、私には2人の子どもがおりますが、長女が小学5年生の時に「不登校」に、そして長男が社会人になってから、気分障害という重いうつ病を経験しました。私たち夫婦にとつてはまさに晴天のへきれきで、「なぜ、わが子がこんな目に遭わなければならないのか?！」と、現実を受け止めることができませんでした。

しかしこの出来事から、私たち夫婦は、今までの親としての在り方を考えさせられ、お詫びと改まりのご修行を頂くことで、おかげへと導かれる経験と

なりました。そして、その経験が、後に寮生たちの助かりにつながっていくのです。神様は本当に無駄事をなさいません。ちゃんと先をお見通しで、寮監のお役を頂いている私に、寮生が助かるがために、わが子をもって、事前に信心の稽古をさせてくださいました。今日は、そんな私の神人物語をお話しさせていただきます。

私の娘は、小学校5年生の12月、ある日突然、人が怖くなり、学校に行けなくなりました。親への暴言や昼夜逆転、不眠など、明らかに精神科領域の症状も出ておりました。しかし、幸いだったことは、娘を受け持ってくれた小学校のスクールカウンセラーが、東京学生寮のすぐ近くにあった東京学芸大学の大学院生で、娘の症状が重いことに気付き、大学の臨床心理士の先生を紹介してくださったことです。

その先生には、たくさんのお話を教えていただきましたが、一番大切なことは、「どんな状態の娘でも丸ごと受け入れること。暴れていようが、暴言を吐いていようが、全てが私のかわいい娘なんだと受け入れなさい」と教えていただきました。

それまでは、良い子に育ってほしいと願いながら、それは親の言うことを聞く、親にとって都合のよい、聞き分けの良い子を求めていました。そし

て、親の理想とする像を求め、そこからはみ出ていることは認めない、という姿勢だったと思います。娘は、その親の期待に応えようとして、本当の気持ちを隠し、良い子を演じていたのです。

私たち夫婦は、今までの親としての在り方が間違っていたことにやっと気付かされました。娘の悲しみがあふれ出るまでそのことに気が付かなかった私たちは、本当に愚かだったと猛省し、神様に心からお詫び申し上げました。

そして、決して簡単ではありませんでしたが、娘を受け入れる努力を続け、改まりの心で生活させていただきました。

娘がしつかりと登校できるようになるまで3年余りかかりましたが、つらいさなかに在籍教会に電話でお取次を頂いたところ、私の母親は、「これは、寮生たちを預かっているからこそ神様からの宿題だと思つて頑張りなさい」と励ましてくれました。まさにそのとおりでした。

## 神様の真意を知る稽古

ちょうどその頃、大学3年の男子寮生が大学に通えなくなつて、部屋にこもりがちになり、心配され

た親御さんが上京してきました。彼はとても優秀で、物事を完璧にこなそうとするタイプでした。親御さんは、優秀だったわが子がなぜ学校に行けなくなったのか、信じられない様子でした。学校や本人に何か原因があるのではないかと見当を付け、とにかく一度、本人を実家に帰して、教育し直したいと申し出られました。

しかし、私は娘の経験があつたので、「この親御さんは以前の自分と似ているな。親の権力で子どもをなんとかしようとしているな」と感じ、今、連れて帰ると、状態が長期化する恐れがあると思ひました。私は彼のお父さんに、まずは焦らずに様子を見てほしいとお願いしました。その上で、私の娘が不登校になった経験を話し、子どもに過度な期待を寄せず、世間体やプライドといった、「人間の物差し」をいったん脇に置いて、「神様の物差し」で事柄を見詰め直し、本人と向き合つてほしいと伝え、親御さんにはいったん帰つていただきました。

ご両親が帰られた後、私はひたすら御祈念させていただき、彼のことを見守り続けました。そうすると、彼もだんだんと心を開き、ある時、本人が一番気になっていたことを本音で話してくれました。そこからだんだんと良くなり始め、ご実家に帰つて就

職もされ、このたびご結婚もされたという、うれしい報告も頂きました。本当にありがたいことで、娘のつらい経験があつたからこそと、神様にお礼申し上げます。

ところが本当に愚かと申しますか、これだけでは私は、神様の真意がまだ理解できておらず、慢心がありました。自分が助けたように思つてしまつていたのです。そして神様から叱られます。次は息子のことです。

大学4年になった長男は、東京ではなく、在籍教会がある那智勝浦町で仕事をしたいとの願いを立て、大学卒業後、那智勝浦町で介護職につきました。仕事も順調で、私も安心していたのですが、仕事上のあることがきっかけで、心のバランスを崩してしまいました。妻はとても心配し、電話で「そちらに行くから」と息子に伝えるのですが、真面目な彼は、親に心配を掛けたくないという思いからか、「来なくていい、大丈夫だから」と、ひたすら母親の申し出を拒み続けました。

しかし、日ごとに状態が悪くなつていく様子が声からもうかがえ、妻は居ても立ってもいられず、息子の言うことを聞かず、息子の元に行つたのです。結果、「来なくてもいい」と言つていた息子でした。

が、「来てくれてありがとう」と言ってもらえたようにです。

その直後に、また卒業間近な男子寮生で、似たようなケースが起きました。彼もまた、私の息子同様、真面目で優しい子でした。睡眠障害に陥り、いろいろと悩みは聞いておりましたが、ある日、薬を多用に服用し、放っておくと、とても危険な状態であることが分かりました。

妻はすぐに彼の母親に電話をし、寮に来てもらいたいとお願いしました。しかし、私の息子がそうであったように、彼も母親に「来なくていい」と言っていたようで、お母さんの方も、「息子が来なくていいと言っているし、もう成人している大人だから、何とかすると思うので、寮には行きません」と言われたのです。妻は息子の経験を一生懸命話し、「息子さんが来なくてもいいと言っているのは、本音ではなく、本当は助けてほしい、来てほしいと思っているはずだから、ぜひ来てあげてください」と懇願しました。

その後、彼の母親は寮に来てくださったのですが、自分が想像していた以上に息子の状態が悪かったことに驚き、2週間、寮に滞在してくださいました。その間、親子でいろんなお話ができたようで、

そこから彼も落ち着きを取り戻し、無事に大学を卒業し、大学院に進学し、その後、大学で助手として活躍されています。

私の息子も、職場復帰まで1年以上かかりましたが、本当に、思いもかけないようなご縁を頂いて結婚をさせていただき、おかげを蒙りました。

## SOSを伝えられる人に

このように、初めのお話では、娘の経験から親御さんには帰っていただき、また息子の経験からは親御さんに来ていただくという、全く正反對の対応となりましたが、われわれ夫婦が、これから起きるであろう事象を見越して、神様はあらかじめ、さまざまなケースをわが子で経験させてくださり、正しい対応ができるように導いてくださいました。本当に神様のなさることは無駄事がなく、ありがたいことばかりでした。

この経験をとおして、子育てにおいて学ばせていただいた、大切な3つのことを紹介させていただきます。

1つ目は先ほど申し上げましたが、子どもが幼い頃から、子どもの存在を丸ごと受け入れるという

こと。2つ目は、安心、安全な環境をつくり、私はここに居ていいんだという感覚を持つ子に育てること。そして3つ目は、苦しい時は正しくSOSを発することが出来る人に育てること。

特に3つ目は、大人になってからでも大切なことだと思います。金光教にご縁を頂いている私たちは皆、お取次を願ひ、お取次を頂くという、心のよりどころがあります。信仰のない人と比べたら、このことはとても恵まれていることなのです。しかし果たして、心から正直なお取次を願ひ、頂いているだろうかということ、今一度ご自分に問うてみてください。つい、お結界では人間心が出て、「こんな話をしたら恥ずかしいのではないか」とか、「恥ではないか」という思いがよぎり、形だけのお取次を願ひ、お取次を頂くことになってしまう場合があります。

私自身、息子の病気の時、普段、遠距離を言い訳にしてご無礼ばかりしていた親教会である和歌山教会に久しぶりに参拝させていただきました。寮生たちには、世な経験をさせていただきました。寮生たちには、世間体やプライドといった人間中心、自分中心の見方から、神様のお心を求める見方を持ちなさいと言っておきながら、この時は、どこまで息子の「心の病」

のことを話すべきか、正直ためらいがありました。

しかし、和歌山親教会お広前の、荘厳かつ優しく包み込んでくださる雰囲気や、親先生の温かい雰囲気、何もかも包み隠さず心からのお取次を頂くことができました。だからこそ、親先生をとおして神様が発動してくださり、おかげを頂けたのだと思います。正直に話す、SOSを伝える大切さを身をもって体験したような次第です。

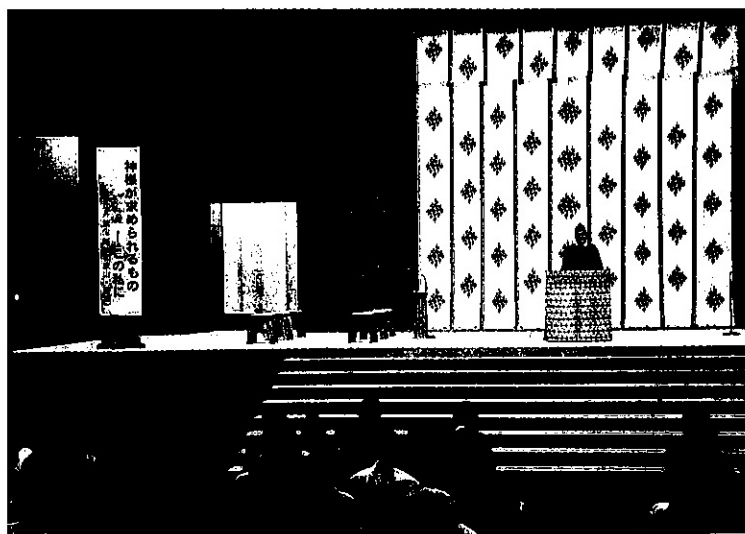
毎年、初めて親元を離れて入寮する学生たちは、「自立」しようと思気込んでいきます。その自立という思い込みをほぐし、肩の力を抜いてもらうために、人は皆、生まれてすぐは自分では何もできず、食事に排せつ、睡眠も、周りの人のお世話を必要としていた事実を思い出してもらいます。

そして、自分の弱さを認めて他人に頼ることができ、それが本来の人間の姿であり、人間はそもそも「弱い」存在で、完璧な人間は一人もいないことを伝えていきます。「弱さ」を認めることができる人は、SOSも発せられるのです。「弱さ」を認め合えるからこそ、人は足りないところを責め合うのではなくて、足りないところを足し合って生きていくことができます。そうやって「弱さ」でつながり合える関係がある。天地の恵みにお世話になりどおしの人

間の姿を知り、共に支え合い、共に育っていく、金光教の信心の大切さを改めて思わせられております。

## 神様のみ思いに添う生き方へ

神様は、本当に要所、要所でさまざまな人や事柄をお差し向けくださり、用意周到に段取りを付けてくださいました。娘が不登校になった時、私も妻も本当に不安で押しつぶされそうになっていました。そのような中で、「これは寮生たちを預かっているからこそ、神様からの宿題だと思って頑張りたい」との私の母親の言葉は、神様はまさに「そのままでの」先の段取りを付けてくださっている証しであります。寮監としての御用をしつかり全うしなさいという、信心しておかげを頂くための課題を私に差し向けてくださっていたのです。ところがその神様のみ思いに気が付かず、慢心して「われよし」としていたご無礼に対し、神様がさらに今度は息子の事柄をとおして教えてくださったわけです。そうだったからこそ、おのずと神様のみ思いに添う生き方へ生まれ変わることができ、そしてそれがまた、新たな寮生への助かりへとつないでくださりました。本当にもつたいなく、ありがたいことでした。



自己責任を問われる厳しい社会情勢の中で、これからまたいろいろな難儀が起きてくると思えます。その時に、「それだからこそ」救い助けようとする神様のお働きを感じ取り、難儀を受ける生き方から、神様のおかけを受ける生き方を、今度は子どもや寮生たちに、ここからさらに展開していただき、まさに神様のお働きを現す「生神の道」へと展開していくことを願って、私のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。